ふるさと見て歩き 第131回

長沢地区の線刻不動明王像

令和２年３月26日、常陸大宮市長沢（字梅木倉）で線刻で描かれた不動明王像が発見されました。不動明王の脇に彫られた銘文には、康正元年（1455）の年号が刻まれていることから、室町時代中期に製作されたものと考えられます。中世に遡る石造物が確認される事例はたいへん珍しく、常陸大宮市の歴史的にも重要であるため、この場を借りて紹介いたします。

古記録と発見時のようす

不動明王像は、枇杷川上流に位置する滝（不動滝）の横にある洞穴に祀られており、康正元年と弘化４年（1847）に作られた２体の不動明王像が安置されていました。長沢地区の不動明王像にまつわる話では、山王神社の祭礼で神輿を滝の近くまで担いだ後、像を滝から運んで神輿の中に納めたと伝わっており、長い間人々の信仰の対象となっていたことが伺えます。しかし、旧山方町時代に実施した石造物調査では、弘化4年の像しか確認されておらず、また地元の人も存在を知らなかったため、康正元年の像は長らく未発見の状態であったと考えられます。

そんな不動明王像ですが、実は江戸時代の古記録にその存在を確認することができます。文化４年(1807)に成立した『水府誌料』には、「山方村梅ノ木蔵坪(中略)ニ瀧有リ、其傍ニ不動ノ碑御座候、于時康正元年三月日、旦那梅木蔵介（助）三郎と御座候よし･･･」と書かれており、像の所在地や銘文が詳細に記されていました。これをもとに現地を訪れ、付近を調べたところ、弘化４年の像の足下に横たわる石に刻まれた不動明王の姿を確認することができました。

▲長沢地区(字梅木倉)の不動滝　※右の洞穴に像２体が所在

▲発見時のようす　※下に横たわる石が康正元年の像

不動明王像について

今回発見された不動明王像は、固い岩に線刻で描かれており、不動明王の特徴である右手に宝剣、左手に羂索を持つ姿が確認できます。不動明王は、大日如来の化身とされており、大日如来を本尊とする密教や、山岳信仰と密教・陰陽道などが融合した修験道と深い関連があると言われています。今回のように、不動明王像が滝の近くで確認できるのも、こうした信仰の修行場として滝が利用されていたことによるのでしょうか。

また、銘文には記録の通り「旦那 梅木蔵助三郎」と書かれていました。このことから、像の造立の施主となるほどの有力者が当時の長沢周辺にいたと推測できます。記録が残っていないため、当時の状況を知ることは非常に困難ですが、こうした断片的な情報から、地域の歴史を可能な限り拾い集めていくことが重要と考えています。

線刻で描かれた中世の不動明王像は、茨城県北はおろか茨城県内でもほとんど事例がない貴重なものです。このように、各地域に眠っている文化財はまだまだ存在すると思われます。今後も調査を続けて参りますので、情報があればお寄せください。

▲石に刻まれた不動明王(康正元年)(左)、とその拓本(右)

※２体の不動明王像は現在、歴史民俗資料館大宮館に寄託されています。(康正元年の像は展示予定)